ある日のスケジュール大公開！
福祉専門職の“1日”



職場の雰囲気もよく、休暇も取りやすいです！

退庁後に食事にいったり、
夏休みをとって旅行に行ったりとみんな仲がいい職場です！
雰囲気もいいので休暇も取りやすいので、
プライベートでの旅行も楽しんでいます。

社会福祉職 30歳 女性

〈入庁年度〉平成30年
〈現在の所属〉子ども家庭センター 育成支援課
〈所属歴〉平成30年 子ども家庭センター 生活福祉課
令和2年 子ども家庭センター 相談対応課
令和4年 子ども家庭センター 育成支援課

仕事内容

一時保護後に家庭へ戻ることが難しく、施設入所や里親委託になった子どもたちを担当しています。家族や関係機関と連携しながら家庭環境を整え、子どもが安心して生活できる場を見つけることが主な役割です。未就学児を中心に、里親委託中の子どもや施設で生活する子どもを継続的に支援し、一人ひとりにとって望ましい生活環境を考えながら関わっています。

Q 勤務体制について教えてください。

勤務は平日中心で、土日祝日は基本的に休みです。日中は、児童が生活する施設への訪問や保護者との面接、関係機関との連携を行いながら、家庭復帰や里親委託に向けた支援や調整を進めます。また、ケースの検討や記録作成などのデスクワークも重要な業務です。支援の状況によっては残業が発生することもありますが、チームで協力しながら業務を進めており、業務の調整によって休暇も取得しやすく、仕事とプライベートのメリハリをつけて働くことができます。

Q 1日のスケジュールはどのように管理していますか？

日々の業務は、担当する子どもや家庭の状況に応じてスケジュールを調整しながら進めます。保護者の方との面接は、その方の状況や話す内容に応じて必要な時間を考え、予定を組みます。また、施設や里親宅で生活する子どもたちとは、関係づくりのために定期的な面接を行っており、ひと月全体の予定を見ながら計画的に調整しています。施設訪問や関係機関との連携も含め、優先順位を考えながら柔軟に対応しています。

Q この仕事で大変なことはなんですか？

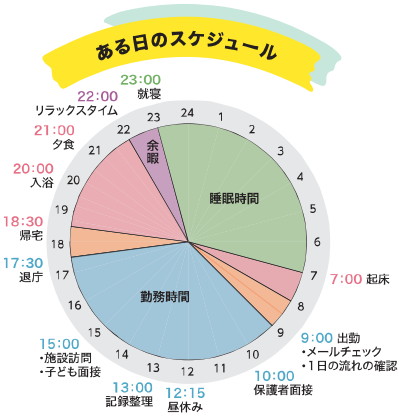
この仕事は、子どもや家庭の人生に深く関わる仕事であり、何がその子にとって最善なのかを考え続ける難しさがあります。保護者との関係調整に悩むことや、重い判断を求められる場面もあります。印象に残っているのは、2歳の頃に虐待を受けた子どもが、成長してから当時の出来事を自分の言葉で話してくれたことです。小さな子どもでも、感じたことや記憶は心の中に残っているのだと実感しました。支援を通して子どもが安心して過ごせるようになったり、新しい環境で笑顔を見せてくれる姿を見ると、この仕事の大きなやりがいを感じます。子どもの未来に寄り添い、その成長を支えることができる点に、この仕事の意義があります。

Q 休日はどのように過ごしていますか？

休日は、自宅でゆっくり過ごしたり、テレビを見たりしてリフレッシュしています。また、長期休暇を利用して旅行に出かけることもあり、仕事とプライベートのメリハリをつけながら過ごしています。職場の同僚と一緒に旅行に行くこともあり、日頃から良い関係性の中で働くことができています。

福祉の仕事を選んだきっかけ

もともと子どもに関わる仕事に関心があり、保育士資格も取得しましたが、子ども本人だけでなく、その子を取り巻く家庭環境や保護者の状況など、より広い視点から支援したいと考え、福祉の道を志しました。福祉の仕事は、家庭や地域、関係機関と連携しながら、子どもにとって最善の環境を考えていくことができる点に大きな魅力を感じました。就職先を考える中で、大学の先輩から大阪府の福祉専門職の話を聞き、市町村よりも広い範囲で多様なケースに関わることができ、都道府県だからこそできる支援があることを知りました。また、他府県は地域が広く異動範囲も大きい一方で、大阪府は比較的コンパクトでありながら幅広い経験を積める環境であると感じたことも、大阪府を志望した理由の一つです。子どもや家庭に寄り添いながら、より多くの人の人生に関わることができる福祉の仕事に魅力を感じ、この道を選びました。



受験される方にひとこと

児童分野の仕事は、正直に言うと簡単ではありません。すぐに結果が出る仕事でもなく、悩むことや迷うこともたくさんあります。私自身も、1年目・2年目は戸惑うことばかりでした。でも、一人で抱え込む仕事ではありません。周りには必ず一緒に考えてくれる上司や先輩、同僚がいます。チームで支える体制があるからこそ、少しずつ経験を積み重ねていくことができます。子どもの人生に関わる責任の重さはありますが、その分、大きなやりがいもあります。時間をかけて関わった支援が、子どもの笑顔や家族の変化につながったとき、「この仕事を選んでよかった」と思える瞬間があります。不安もあると思いますが、安心して飛び込んできてください。一緒に悩み、一緒に考えながら、子どもたちの未来を支えていけたらうれしいです。

気持ちをリセットして仕事への活力へ！

大変な仕事ではありますが、同僚と話すことで、
気持ちを整理し前向きに仕事と向き合うことができます。
職場の雰囲気も良く、食事に行くことも。休日は家族と出かけたり、趣味のキャンプを楽しむなど、仕事から離れて過ごす時間を意識的につくっています。
自然の中で過ごすことで気持ちがリセットされ、
次の仕事への活力につながっています。



社会福祉職 35歳 男性

〈入庁年度〉平成30年
〈現在の所属〉子ども家庭センター 保護課
〈所属歴〉平成30年 修徳学院 企画調査課
令和3年 修徳学院 兼 子ども家庭センター 相談対応課
令和5年 子ども家庭センター 保護課

仕事内容

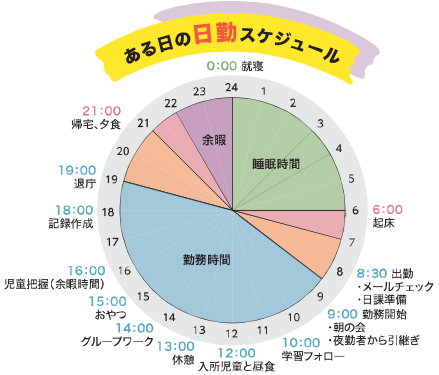
一時保護所は、さまざまな事情で家庭での生活が難しくなった子どもたちを受け入れ、安全で安心して過ごせる生活の場を提供する施設です。保護された子どもたちと日々を共にし、食事や入浴、学習など生活全般を支えます。また、子どもの様子を丁寧に観察し、心身のケアを行いながら強みや課題を把握し、その後の支援につなげます。勤務は交代制で夜勤もあり、体力と冷静な判断力が求められる仕事です。

福祉の仕事を選んだきっかけ

祖母が特別養護老人ホームに入所していた際、職員の方が寄り添い、安心した表情を見せていたことが、福祉の仕事に興味を持ったきっかけです。人の生活を支える仕事に魅力を感じ、大学で福祉を学びました。卒業後は高齢者施設で相談員として働きましたが、専門性を高めながら幅広い支援に関わりたいと考え、関心のあった児童福祉分野にも挑戦したいと思うようになりました。その中で、大阪府で福祉職として働く同級生の話を聞き、より多様な支援に携われる環境に魅力を感じ、入庁を決意しました。

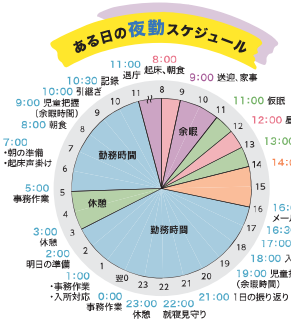
Q 大変だけどそれでも続けていられる理由はなんでしょうか？

この仕事の大変なところは、子どもたちは不安や怒りを抱えて来所するため、強い言葉で感情をぶつけられることもあり、感情的にならずに向き合う必要があることです。受け止めながらも、自分自身が飲み込まれないよう距離感を保つことを大切にしています。最初は関わり方に悩み、不安を感じることも多くありました。それでも続けてこられたのは、チームで支え合える環境があるからです。また、以前関わっていた子どもから「一時保護所の職員ってどうやったらなれるん？」といわれたときは、その言葉を通して、自分たちの関わりが子どもの将来につながっていることを実感し、この仕事の意義とやりがいを強く感じました。



Q 夜勤がありますがどのように調整していますか？

日勤・夜勤を含む交代制勤務のため、生活リズムの管理は特に意識しています。夜勤の後は必ず明けと休みがセットになっているため、しっかりと休息を取ることで体調を整えています。また、夜勤明けは午前中に勤務が終わるため、その後の時間を休養やリフレッシュに充てるなど、無理のない過ごし方を心がけています。交代制勤務は大変な面もありますが、オンとオフのメリハリを意識することで、心身のバランスを保ちながら仕事に向き合っています。



受験される方にひとこと

エネルギーがある人、感情を引きずりすぎない人、子どもの変化を待てる人などは福祉の仕事に向いているように思います。
最初は正直しんどいかもしれません。しかし、フォロー制度はしっかりしているので仕事はそのうちできるようになります。
大変な仕事ですが離職率が低いのはそういったチームでのフォロー体制や、制度がしっかりしていることもあると思います。やりがいがある仕事がしたいと思う方もぜひ来てください。子どもたちは本気でぶつかってきます。だからこそ、信頼してくれたと感じられた瞬間は、本当にうれしい。子どもと本気で向き合っていきましょう。僕は、この仕事が好きです。



一人ひとりの心に向き合い、支援の道をつくる心理職。

心理職

34歳 男性
〈入庁年度〉平成28年
〈現在の所属〉子ども家庭センター 相談対応課
〈所属歴〉平成28年 子ども家庭センター 育成支援課
令和2年 子ども家庭センター 相談対応課
令和4年 子ども家庭センター 相談対応課

仕事内容

児童心理司として、子どもへの心理検査を通じたアセスメントや、心理教育、面接による相談支援を担当しています。面接や心理検査を通して子どもの特性や状況を把握し、その結果を本人や保護者、関係機関に伝えています。「どうすればその子に合った支援ができるか」を考えながら、関係機関と連携し、支援の方向性を一緒に整理していくことも大切な役割です。子ども一人ひとりに向き合い、その子らしい成長を支える仕事だと感じています。相談に来られる保護者やお子さんの多くは、「うまくいかないこと」に悩んでいます。しかし、「努力していること」や「うまくいっていること」にも注目し、子どもの成長発達につながる支援を日々模索しています。

福祉の仕事を選んだきっかけ

もともと「人のこころの動き」に興味があり、心理学を学べる大学に入学しました。大学で臨床心理を学ぶ中で、漠然と「心理職として働きたい」という思いを持つようになりました。進路を考える中で、子ども家庭センターの業務について先輩職員から話を聞き、「厳しくもやりがいのある仕事だ」と感じました。公務員の心理職という選択肢を知り、行政の立場から子どもや家族を支えることに魅力を感じたことが、目指したきっかけです。また、虐待に関する文献を読んだり、先生の話を聞く中で、虐待の背景にある保護者の気持ちや考えは非常に多様であることを知りました。子どもだけでなく親の「こころ」も扱う環境に魅力を感じ、この仕事を選びました。

Q 資格を取得する必要はありますか？

大阪府の心理職は、臨床心理士や公認心理師などの資格を必須としておらず、心理学の課程を修めて大学を卒業または大学院を修了すれば受験資格を満たします。子ども家庭センター配属になると、先輩職員の指導を受けながら心理専門職として働き始めることになります。なお大学院で必要な単位等を取得していれば入庁後に各種資格を取得することも可能で、働きながら専門性を高めていける点も魅力のひとつです。また、大阪府は心理職の採用人数が比較的多く、虐待対応や非行対応など幅広いケースに関わることができるため、さまざまな経験を通して専門性を高めることができます。多様なケースに携わることで、心理職としての視野を広げ、実践的な力を身につけられる環境だと感じています。資格を持っているからと言って変わるものはないですが、個人的に感じているメリットとしては臨床心理士の資格は更新制度があり、研修などを通して継続的に学ぶ機会が増えるという点です。専門性を維持・向上させながら働き続けることができる点も大きなメリットです。資格を持つことで、自身の専門性を深めながら、より質の高い支援につなげることができると感じています。

Q 大変だけど続けていける理由はなんですか？

子どもや保護者の方と向き合う中で、すぐに変化が見られるわけではなく、どのように関わればよいのか悩むことも多くあります。面接の中で子どもが何も話してくれなかったり、保護者の方の強い思いを受け止めながら支援を進める難しさを感じる場面もあります。特に最近は、子どもの性問題に関わるケースも増えています。正直に話してもらうこと自体がとても難しいテーマです。だからこそ、少しでも話せたことを大切にし、「話してくれてよかった」と伝えることを心がけています。正直に話すことが、その子にとってプラスになると感じてもらえるように関わっています。変化はすぐには見えません。1日や2日で結果が出る仕事ではありません。それでも、継続して関わる中で子どもや保護者の方に少しずつ変化が見られたり、検査結果や関わりについて伝えた内容が支援に役立ったと実感できた時に、大きなやりがいを感じます。また、一人で抱えるのではなく、先輩や同僚と相談しながら支援を進められる環境があることも、仕事を続けられている理由の一つです。目の前の子どもや家庭のために何ができるかを考え続け、その成長や変化に関われることが、この仕事を続ける原動力になっています。

受験される方にひとこと

「自分にこの仕事はできるのだろうか」と不安に思う方もいらっしゃるかもしれません。私自身、仕事の中で力不足を感じることは多々あります。そしてそのたびに、日々勉強を続けることの大切さを痛感しています。この仕事は大変なこともありますが、子どもや保護者の方の変化や成長に関わることができる、とてもやりがいのある仕事です。大阪府では、さまざまな経験を通して心理職として成長していくことができます。目の前の人のために何ができるかを大切にしながら、ぜひ心理職としての一歩を踏み出してほしいと思います。



その人の“もう一度できる”を、そばで支える。

心理職

30歳 女性
〈入庁年度〉令和2年
〈現在の所属〉障がい者自立センター 自立支援課
〈所属歴〉令和2年 子ども家庭センター 相談対応課
令和5年 障がい者自立センター 自立支援課

仕事内容

脳血管障がいや脊髄損傷などによって中途障がいを負った方が、地域で生活していくための「自立訓練」を行っています。日常生活動作の訓練や、高次脳機能障がいのある方への認知訓練などを実施し、地域生活へつなげていく支援をしています。入所されている方への生活支援も含め、多職種で連携しながら支援にあたっています。利用者の多くは、病気や事故によって突然生活が変わった方々です。以前の自分とのギャップに苦しみ、できないことへのいら立ちや落ち込みを抱えておられることもあります。そうした思いを受け止めることは簡単ではありませんが、心理職として話を聞き、一緒に「どうすればできるか」を考えていくことが私の役割です。

福祉の仕事を選んだきっかけ

もともと、人の話を聞くことが好きでした。大学で心理学を学ぶ中で、「話を聞くこと」を仕事にできる道があると知り、心理職を志すようになりました。その中でも公務員を選んだのは、特定の分野に絞るのではなく、さまざまな領域で経験を積みたいと思ったからです。児童分野、障がい分野をはじめ、幅広く関わることで、自分自身の視野も広がるのではないかと感じました。大阪府を選んだ理由は、心理学を専門的に学んだ人が心理職として採用され、研修制度やキャリアリードが整っている点に魅力を感じたからです。専門性を大切にしながらも、長く安定して働ける環境があることに安心感を持ちました。「話を聞くことが好き」という原点と、幅広い分野で経験を積みたいという思いが、この仕事を選んだきっかけです。

Q この仕事の「大変さ」や「やりがい」は何ですか？

利用者の方の中には、障がいによって今までできていたことができなくなり、不安やいらだちを抱えている方も多く、その気持ちに寄り添いながら支援することは簡単ではありません。一人ひとり症状や状況が異なるため、どう関わることがその方にとって最善なのかを考え続ける難しさもあります。それでも、訓練を通してできることが増えたり、「うまくできました」と笑顔で報告してくださったり、退所後に「就職が決まりました」「元気に生活しています」と近況を伝えに来てくださることがあります。その瞬間、自分の関わりがその方の新しい生活につながっていることを実感でき、大きなやりがいを感じます。

Q 異動で分野が変わるのは大変ですか？

最初は、対象となる方の年齢も支援内容も大きく変わったので、戸惑いはありました。子ども家庭センターでは子どもや家庭への相談支援が中心でしたが、現在は成人の方が主に利用されている入所施設での支援になるため、関わり方も異なります。また、医療やリハビリに関する専門用語も多く、最初は会議の内容についていくのが大変でした。ただ、先輩や他職種の方が丁寧に教えてくださり、分からないことは後から確認しながら、少しずつ理解を深めていきました。分野が変わることで大変さもありますが、その分新しい知識や視点を身につけることができ、自分の成長につながっていると感じています。さまざまな分野を経験できることは、大阪府で働く魅力の一つだと思います。

Q 今後関わっていきたい分野はありますか？

今後も心理職として、面接や心理検査などの専門性を活かしながら、さまざまな分野で経験を積んでいきたいと考えています。児童分野や障がい分野に限らず、幅広い現場で支援に関わることで、自分の視野をさらに広げていきたいです。大阪府ではキャリアリードを通して多様な分野を経験できるため、それぞれの現場で学びを重ねながら、心理職として成長していきたいと考えています。

受験される方にひとこと

この仕事は、すぐに答えが出るものではありません。関わりの中で迷うこともありますし、自分の力不足を感じることもありますが、その分、小さな変化や成長に立ち会えたときの喜びはとても大きいです。「人の話を大切にしたい」「子どもや家族に寄り添いたい」――そんな思いがある方なら、力を発揮できると思います。不安もあると思いますが、その気持ちも大切にしながら、ぜひ挑戦してほしいです。一緒に学び、支え合いながら働ける日を楽しみにしています。



時代の変化とともに、支援の最前線で歩み続ける。

社会福祉職

46歳 女性
〈入庁年度〉平成16年
〈現在の所属〉保健所 地域保健課 精神保健福祉チーム
〈所属歴〉平成16年 保健所 地域保健課 精神保健福祉チーム
平成21年 保健所 地域保健課 精神保健福祉チーム
平成23年 こころの健康総合センター 企画課・地域支援課
平成28年 本庁 健康医療部保健医療室地域保健課
令和2年 保健所 地域保健課 精神保健福祉チーム

仕事内容

現在は保健所で、精神障がいのある方やそのご家族からの相談対応を中心に業務を行っています。
・精神障がいのある方や家族からの相談支援
・医療機関へのつなぎ
・精神科病院からの退院支援
・地域関係機関との連携・環境調整
・自殺未遂者支援、依存症対策 など
近年は、自殺対策や依存症支援など新たな施策も増え、時代の変化に応じた取り組みが求められています。

福祉の仕事を選んだきっかけ

学生時代に経験した児童館や障がい者施設でのボランティア活動を通じて、障がい者や子ども達等いろいろな方と接する機会をもつことで、さまざまな価値観と出会い、人と関わることの楽しさを知ることができました。その経験をきっかけに、福祉の分野に強く関心を抱くようになり、自身の大学で資格取得可能な精神保健福祉士養成課程に進むことを決意しました。この課程では、専門的な知識やスキルを学ぶだけでなく、実際の現場での実習を通じて、理論と実践を結びつける貴重な経験を積むことができました。将来、この精神保健福祉士の資格を活かした仕事がしたい！そう思ったのが、福祉の仕事を選んだ理由です。

Q どんな時にやりがいを感じますか？

精神保健福祉の仕事は、相談者が目標を達成したり、困難を乗り越えたりした時などやりがいを感じた瞬間は自分にとっても大きな糧になりますが支援をはじめてすぐに結果が出るものではありません。それでも、粘り強く長期的に関わる過程で、「受診してみようかな」「地域で暮らしてみようかな」そんな前向きな言葉が聞けたとき、この仕事をしていてよかったと心から思います。大きな変化ばかりではなく、小さな一歩の積み重ねです。その協働的なプロセスを通じて"変わっていく瞬間"に立ち会えることが、何よりのやりがいです。人には本来、回復する力がある。その力を信じて相談者に伴走支援できることに、この仕事の面白さと意味があると感じています。

Q この20年で変わったこと・変わらないことはありますか？

この20年で、福祉を取り巻く環境は大きく変化しました。制度や支援の仕組みは整備され、地域で生活を支える体制は広がっていますが、その一方で相談内容はより複雑化・多様化しています。私が入庁した平成16年頃は、統合失調症などの精神疾患に関する相談や、長期間精神科病院に入院されている方の退院支援が大きな業務の中心でした。当時は、いわゆる「社会的入院」と呼ばれる長期入院の課題があり、地域で生活できるよう支援することが重要な役割でした。それに対して現在は、従来の相談に加えて、自殺未遂者への支援や依存症対策など、新たな社会課題への対応が大きく増えています。特に自殺対策や依存症に関する相談は以前よりも増えており、支援の内容もより幅広くなりました。また、中高生のオーバードーズなど、若い世代に関する相談に関わる機会も増えています。仕事の進め方も変化しており、以前に比べて関係機関と連携する機会や会議が増えています。精神障がいのある方を地域全体で支えるため、医療機関や福祉施設、行政などと連携しながら支援を進める場面が多くなりました。福祉だけで完結するのではなく、医療・教育・地域などとつながりながら支えることが当たり前になってきました。一方で、相談支援を通して当事者の方に寄り添い、地域生活につなげていくという仕事の本質は、今も変わっていません。この20年間で社会の課題は変化し、それに伴って求められる支援の形も広がってきましたが、その中で一人ひとりに向き合い、地域でその人らしく生活できるよう支えるという役割は、これからも変わらず大切にしていきたいと感じています。

受験される方にひとこと

社会福祉職は、医療機関や福祉施設、教育機関、行政機関など、さまざまな場で活躍できる仕事です。その中でも大阪府の社会福祉職は、行政だからこそできる施策や事業に携わり、地域全体を支えることができる点に大きなやりがいがあります。大変さもありますが、支援を通してその人らしく生活する姿を見ることが励みになります。また、公務員として安定して働けることも魅力の一つです。ぜひ情報を集め、自分が働いて良かったと思える場所を見つけてください。

修徳学院ってどんなところ？

子どもたちと同じ寮で生活し、朝の起床から学校後の時間、
就寝まで日々の暮らしを共にします。面談だけで終わるのではなく、
生活を重ねる中で悩みや葛藤にも向き合いながら信頼関係を築いていく仕事です。
私たちの実の子どもも一緒に生活しており、より"家"に近い環境の中で、
子どもたちはきょうだいのように関わり合いながら過ごしています。



修徳学院の特徴

家庭的な寮生活
「小舎夫婦制」といって、寮ごとに夫婦の職員（寮長・寮母）が生活を共にし、24時間ずっと子どもたちと関わって支援する体制になっています。

教育と日常の支援
学習指導・作業指導・生活指導などを通じて、基礎学力・生活習慣・自立心の育成を目指します。院内では併設の学校で義務教育も行われています。

スポーツや体験活動もあり
スポーツ活動や農作業などの体験活動も取り入れられており、子どもたちがのびのびと過ごしながら成長できる環境づくりがされています。

男子寮は、エネルギーが外に向きやすく、体を動かしながら関係を築くことが多い環境でした。プールや野球などを通して、比較的距離の近い関わり方をしていました。

女子は「見てほしい」「わかってほしい」という思いが強く、感情が内に向きやすい傾向があります。リストカットやオーバードーズなどに表れることもあり、男子寮とは異なる難しさがあります。

現在の所属：修徳学院
男子寮を経て、現在は女子寮にて支援



寮長：40歳 入庁：平成30年
中学校教員として勤務していましたが、修徳学院内の学校に着任したことが転機となりました。生活を共にする支援の深さや、子どもが大きく変わる姿に心を動かされ、「もっと近い立場で支えたい」と思うようになりました。その思いから、夫婦で寮を担う道を選びました。

寮母：39歳 入庁：平成22年
大学時代に児童養護施設で実習を経験し、夫婦で子どもたちの生活を支える姿に触れたことが原点でした。当初は「自分にできるだろうか」と不安もありましたが、修徳学院でさまざまな役割を経験する中で、子どもと深く関わる寮の仕事の魅力を実感。子どもたちと本気で向き合う先輩職員の姿に心を動かされ、夫婦で寮を担う道を選びました。



Q この仕事のやりがいは何ですか？



一緒に生活する中で、子どもが少しずつ変わっていく姿を間近で見られることですね。最初は心を閉ざしていた子が、自分の気持ちを話せるようになったり、『ここ出たくない』と言ってくれたり。退所後に顔を出してくれる子もいて、そのたびに"つながりは続いているんや"と実感します。



私は「分かり合えた」と子どもから感じた瞬間が1番嬉しいです。たくさんぶつかり合った子が、最後に『この寮でよかった』と言ってくれた時は、本当に報われます。生活を共にするからこそ見られる成長があって、実の子どもも含めてみんなで育ち合っている感覚があります。私たちも子どもたちにも支えられながら、一緒に成長しています。

Q 今までで大変だったこと、苦労したことはありますか？



子どもに本気で向き合う分、うまくいかない時はしんどいですね。ルール違反が続いたり、退所後にまた問題を起こしてしまったと聞いた時は、正直落ち込みます。でも、それも含めてその子の人生の一部。ここでの経験がどこかで生きてくれたらと思いながら関わっています。



女子寮では、自分を傷つけてしまう子も多く、夜遅くまで話を聞くこともあります。どう声をかければいいのか悩むこともありましたし、自分の未熟さを感じることもありました。でも、何度もぶつかりながら関係ができていく中で、子どもたちに教えてもらうこともたくさんあります。大変さの中に、学びや成長がある仕事だと思っています。

Q 実際、休みは取れますか？



正直に言うと、"仕事と生活の境目がはっきりしている"働き方ではありません。子どもと一緒に暮らしているので、気持ちの面では常にどこかでつながっています。ただ、交代で見てもらえる体制があるので、休みを取ることはできます。旅行に行くこともありますし、リフレッシュする時間も大切にしています。



生活がそのまま仕事でもあるので、"完全にオフ"という感覚は少ないかもしれません。でも、その分、日々の中でやりがいや充実感を感じられる仕事です。周りの職員に支えてもらいながら休みを調整していますし、家族の時間もきちんとつくっています。

Q 資格がなくても目指せますか？



専門職としての受験資格は必要ですが、寮で働くうえで必須の資格はありません。大事なのは資格以上に、子どもと本気で向き合いたいという気持ちです。マニュアル通りにいかないので、"相手を尊重し、人と人として向き合う"ことを大切にできる人が向いていると思います。



子どもの感情に振り回されるのではなく、まず受け止めようとすることが大切です。完璧じゃなくて大丈夫。むしろ、失敗したら『ごめんね』と素直に言えること。資格よりも本気で向き合ってくれる人かどうかです。大変な仕事ですが、喜怒哀楽のある毎日を"面白い"と思える人には向いていると思います。

受験される方にひとこと



仕事をしているという感覚より、子どもと一緒に生活することがそのまま仕事になっている、そんな毎日です。
"自分なんかに何ができるのか"という不安は、正直いまでもあります。でも、子どもへの想いがあれば伝わる子たちばかりです。まずは一歩、踏み出してみてください。



人と関わることは楽しくもあり、時には辛いこともあります。でも、だからこそ学べることがたくさんあります。
"できるかできないか"ではなく"やるかやらないか"。これは子どもたちにも伝えている言葉です。やってみないと分からないことがある。その一歩を踏み出す気持ちがあれば、きっと大丈夫です。

経験を積み重ねて成長する
Career Lead
～キャリア リード～

大阪府福祉部では、福祉全般に関する幅広い知見・経験の習得と
高度な専門性の獲得を両面で見据え、福祉専門職のキャリア形成をリードします。
積極的かつ計画的、そして多様性に配慮した配属を行い、
社会福祉を取り巻く様々な課題解決を行う人材を養成します。



モデル1　豊かな実践経験　多方面の知識・経験を持つジェネラリスト

「相談系」「施設系」などの職場や、「児童福祉」「障がい者福祉」「女性福祉」などの福祉分野を3～4年ごとに経験することで、福祉専門職としての幅広い経験を積み、総合的な見識を得ることができます。
その後、個人の適性等を考慮しつつ、より専門性の高いキャリア形成をはかります。

施設系 障がい者福祉 ／ 1～3年目 砂川厚生福祉センター
▶
相談系 児童福祉 ／ 4～6年目 子ども家庭センター
▶
相談系 女性福祉 ／ 7年目～ 女性相談センター

モデル2　重層的な学び　特定分野について、深い知識と優れた技術を持つスペシャリスト

様々な社会環境の変化により、福祉を取り巻く課題は多岐に渡り、そして複雑化しています。
その中で、早期に各福祉分野の高度な専門性を身につけるプロフェッショナルの人材育成にも取組んでいます。

ひとつの分野に対し、より深い理解と専門性を身につけることを目的に、同一の分野に配属されることもあります。
早期段階から専門性の深化を意識したキャリア形成を支援します。

相談系 児童福祉 ／ 1～3年目 子ども家庭センター（虐待相談の対応）
▶
施設系 児童福祉 ／ 4～6年目 子どもライフサポートセンター
▶
相談系 児童福祉 ／ 7年目～ 子ども家庭センター（施設入所児童に対する支援）

※児童福祉分野の専門性の早期獲得を目的にしたキャリア形成の一例

大阪府福祉専門職の活躍の場は多岐に渡り、幅広い知識と経験や高度な専門性が求められます。

支援形態	福祉分野	職場一例
施策立案	福祉全般	本庁
相談支援	児童福祉	子ども家庭センター
	障がい者福祉	障がい者自立相談支援センター
	女性福祉	女性相談センター
	生活保護	子ども家庭センター
	精神保健福祉	保健所
生活支援〈施設等〉	児童福祉	子どもライフサポートセンター
	障がい者福祉	砂川厚生福祉センター

昇任制度
昇任は勤務成績等を考慮した能力主義で行われます。

技師級 ▶ 主査級 ▶ 課長補佐級 ▶ 課長級 ▶ 次長級 ▶ 部長級

主査級以降のキャリア形成・専門基盤の育成　専門性に基づく援助技術の実践、後進育成　施策企画・実施者、臨床専門・育成指導職へ

キャリアパス紹介

現場と本庁の両方を経験している「福祉専門職のキャリアの全体像」



社会福祉職
45歳 男性
〈入庁年度〉平成16年
〈現在の所属〉本庁 子ども家庭局 家庭支援課 課長補佐

大阪府本庁で、子ども家庭センター（児童相談所）や女性相談センターの所管課として、事業立案や予算確保、議会対応、制度・体制づくりの調整などを行い、相談支援の現場を支えています。また、市町村の児童福祉主管課に対する事業調整や研修の実施、児童虐待防止に向けた啓発キャンペーンの企画・運営、困難な状況にある女性を支援するための行政計画の策定などにも携わっています。府全体の相談支援が円滑に機能するよう、行政の立場から現場を支える役割を担っています。

H16　一時保護所から始まった福祉職としての原点
子ども家庭センター 保護課（一時保護所）

入庁後、子ども家庭センターの一時保護所に配属され、家庭で生活することが難しい子どもたちを受け入れ、食事や入浴、学習支援など日常生活全体を支える業務に携わりました。子どもたちの様子を丁寧に観察しながら、一人ひとりが安心して過ごせる環境づくりに努めていました。大学院に通いながらの勤務で、夜勤を含む不規則な業務と研究・論文作成の両立は大きな苦労でした。また、子どもたちそれぞれの背景や思いに向き合う難しさに悩むこともありましたが、先輩職員の支えの中で経験を重ね、生活を共にする中で、信頼関係を築くことの大切さを学びました。これらの経験は、福祉職としての基礎を培う貴重な時間となりました。

H20　本庁 障がい福祉室 地域生活支援課

H22　子ども家庭センター 地域相談課

H26　障がい者自立相談支援センター
知的障がい者支援課（主査級に昇任）

本庁の障がい福祉室地域生活支援課では、障がいのある方が地域で安心して生活できるよう、制度の運用や事業調整、関係機関との連携を通して支援体制を整える行政業務に携わりました。現場の支援が円滑に行われるよう、地域生活を支える仕組みづくりに関わりました。現場で直接支援を行ってきた立場から、仕組みを整える側へと役割が変わり、当初は戸惑いもありましたが、制度や施策が現場を支えていることを実感しました。この経験を通して、個別支援だけでなく、仕組みづくりの重要性を学び、現場と行政の双方の視点から福祉を捉える基盤となりました。

H30　本庁 子ども室 家庭支援課 総括主査

R2　子ども家庭センター 育成支援課 総括主査（SV）

R4　子ども家庭センター 相談対応課 総括主査（SV）

ケースワーカーから課長へ 支援する側から組織を支える側へ

R5　同センター 相談対応課長（課長補佐級に昇任）

障がい者自立相談支援センター（知的障がい者支援課）では、知的障がいのある方の療育手帳の判定業務に携わりました。申請者への面接や行動観察を通して状況を把握し、手帳交付の可否を判断する役割を担っていました。本人の特性や生活状況を客観的に評価する専門的で慎重な判断が求められ、判定がその後の生活や支援に関わる責任の重さを感じながら業務に取り組みました。この経験を通して、障がい福祉に関する専門知識を深めるとともに、一人ひとりの状況を多角的に理解し、適切な支援につなげる視点を養うことができました。

2カ所の子ども家庭センターにおいて、総括主査（SV）として現場対応の主軸を担いつつ、後輩のケース担当者が適切に対応できるよう、ケース対応、職員育成、進捗管理等の多岐にわたる業務にバランスを取りながら取り組みました。その後、課長となり、グループ全体のケース対応や職員の健康等に責任を持つ立場として、支援方針の判断や関係機関との調整、職員が安心感をもって働ける環境づくりをする中で、チームで支援を行う重要性と、組織を支える立場としての視点を身につけることができました。

R7　本庁 子ども家庭局 家庭支援課 課長補佐

福祉専門職の魅力

福祉専門職の魅力は、支援を必要とする方一人ひとりに寄り添い、その人らしい生活を支えられることです。子ども家庭センターでは、困難な状況にある子どもや家庭と向き合い、関係機関と連携しながら支援を進めます。子どもや家族が少しずつ安心した表情を見せてくれた時に、大きなやりがいを感じます。また、大阪府では現場での相談支援だけでなく、本庁で制度づくりや体制整備に携わるなど、幅広い経験を積むことができます。さまざまな分野を経験する中で視野が広がり、福祉全体を支える立場として成長を実感できることも、この仕事の魅力です。

めざしている人へメッセージ

この仕事は決して楽ではなく、迷いや判断に悩むこともあります。それでも、子どもや家庭に真摯に向き合い、「よりよい支援とは何か」を考え続けることに大きなやりがいがあります。現場や本庁などさまざまな立場を経験する中で感じたのは、「一人ではできない仕事」だということです。仲間と支え合い、悩みながら前に進んでいきます。完璧である必要はありません。学び続ける姿勢と、目の前の人を大切に思う気持ちがあれば、成長し続けることができます。子どもたちの未来を守るこの仕事に、ぜひ挑戦してほしいと思います。

対談インタビュー

先輩職員からのスーパービジョンで、1年目でも安心して支援ができます！

2年目の職員と2人の先輩にお話を聞きました！



社会福祉職

現在の所属　子ども家庭センター 相談対応課

仕事内容　地区担当チーム

学校や警察、一般市民などからの虐待通告に対応し、子どもの安全確認や家庭への支援を行っています。家庭訪問や面接を通じて状況を把握し、一時保護中の支援や解除後のフォロー、在宅支援、市町村との連携など、虐待の再発防止・未然防止に取り組んでいます。また、性格や行動に関する相談など、幅広い相談支援にも対応しています。ケースワーカーは担当ケースの調査や支援を行い、主査（SV）は地区担当ケースワーカーの指導や支援方針の検討を通して、チーム全体で適切な支援が行えるよう役割を担っています。

職場の雰囲気を教えてください。

S うちは全体的に明るい職場やと思います。忙しいのは忙しいけど、ギスギスしてないってよく言われますね。

C うん。シビアなことも多いけど、合間にちょっと雑談が入ったりして、ちゃんと切り替えられる空気があります。

N 私も最初に入った時、「思ってたより明るい」って感じました。仕事の話だけじゃなくて、趣味の話とかも普通に聞いてくれるのがありがたいです。

C 何の話してたっけ、最近。

N アニメの話もしましたし、ライブに行った話とかも（笑）。そういう話を聞いてもらえるだけで、だいぶ気持ちが楽になります。

S 休憩中だけじゃなくて、業務中もちょっと笑い声が聞こえることもありますね。大変さを分かり合いながら働けるのは、うちの良さやと思います。

先輩方から見た後輩の方、後輩の方から見た先輩方はどんな感じですか？

N 先輩たちは本当に優しいです。自分がうまくいかへん時に、代わって対応してくれたり、助言してくれたりして。

C でも、Nさんもめっちゃ成長してるよ。1年目の時って、連絡が入った時に「まず何から？」って迷いやすいけど、掴むのが早かった。

N いやいや、まだ全然です…。

S 相談の出し方が上手いよね。迷ってるところをちゃんと言葉にしてくれるから、こっちもサポートしやすい。

C そうそう。「こう進めたいんですけど、どうですか？」って、自分から動こうとしてくれる感じがあるよね。

N ありがとうございます…。でも、難しい時は「お願いします」って言えるようになったのが大きいかもしれません。

S それは大事なこと。抱え込まないのが一番やし、うちはチームで動く職場やから。上下関係というより、みんなで支え合う感覚が強いと思う。

C 難しい対応の後に、「大変やったな」って言い合えるだけでも、精神的に助かるしね。

N それは本当にあります。話せるだけで気持ちが整理できます。

みなさんの1年目はどんな感じでしたか？

S 私の頃は、今ほど研修が揃ってなくて、「とりあえずやってみる」みたいなところもありましたね。

C 今は初任者向けの研修とか、横のつながりを作れる機会も増えた印象があります。

N ひとつひとつ、上司と一緒に協議するものの、子どもや保護者の意に反する判断の場合もあるため、それを伝えることにはプレッシャーがあります。

C 自分より年上の保護者に対応するのは、やっぱり難しいことも多いよね。

S うん。そこは無理に一人で背負わなくていいと思う。基本、面接や家庭訪問にはSVやジョブトレーナーが同席するので、チームでしっかり方針を固めて対応することが大切やね。

N そう言ってもらえて、すごく楽になりました。「できないこともある」って言ってもらえるだけで、気持ちが軽くなりました。

C あと、外出が多いから事務処理が溜まってしまうやん？

N ほんまに…（笑）。

S 面接や訪問が続くと、戻ってもなかなか時間が取れないし…。

C だからこそ、困った時は相談すること、抱え込まないこと。それがこの仕事ではずっと大事やと思う。

N さん　24歳
〈入庁年度〉令和6年（現在2年目）

大学で心理学を学んでいて、子どもに関わる仕事がしたいと思ったのがきっかけです。子ども家庭センターは大変な仕事だと聞いていましたが、それでも現場で直接子どもや家庭に向き合えるところに魅力を感じました。実際に働いてみると想像以上に難しいことも多いですが、その分学ぶことも多くて、日々成長を感じています。

C さん　43歳
〈入庁年度〉平成30年　〈役職〉主査

平成30年　子ども家庭センター　相談対応課
令和2年　子ども家庭センター　相談対応課

私はもともと市役所で家庭児童相談の仕事をしていました。支援が中心の立場だったんですが、子ども家庭センターは"保護"という権限もあって、より踏み込んだ支援ができる場所。「もっと違う立場から子どもや家庭に関わってみたい」と思い、転職しました。正直、最初は戸惑いもありましたが、新しい環境で学べることはとても多いです。

S さん　38歳
〈入庁年度〉平成22年　〈役職〉総括主査

平成22年　障がい者自立相談支援センター　知的障がい者支援課
平成26年　子ども家庭センター　生活福祉課
平成29年　子ども家庭センター　相談対応課
令和3年　本庁 子ども家庭局
令和6年　子ども家庭センター　相談対応課

Nさんの SVや チーム全体の統括をしています

もともと福祉の分野で働きたいという思いがありました。児童分野を希望していたというよりは、「福祉に携わりたい」という気持ちが強かったですね。その中で配属されたのが子ども家庭センターでした。続けていく中で、この仕事の奥深さや責任の重さを実感して、気がつけば15年目です。

受験される方にひとこと

私も最初は、「自分にできるかな」という不安が大きかったです。でも、わからないことは先輩方が丁寧に教えてくださいますし、困った時には必ず支えてもらえる環境があります。少しずつできることが増えていく中で、自分の成長も実感できる仕事だと思います。不安があっても大丈夫なので、安心して一歩を踏み出してほしいです。

受験される方にひとこと

この仕事は大変なこともありますが、その分、周りの人と支え合いながら働くことの大切さを実感できる仕事です。一人で抱え込むのではなく、チームで考えながら進めていくので、経験がなくても大丈夫です。素直な気持ちで人と向き合える方と、ぜひ一緒に働けたら嬉しいです。

受験される方にひとこと

福祉の仕事は、人と人との関わりの中で成り立っています。すぐに正解が見つかる仕事ではありませんが、仲間と支え合いながら、一つひとつ経験を積み重ねていくことで、自分自身の成長にもつながります。安心して成長できる環境が整っていますので、福祉の分野に関心のある方は、ぜひ挑戦していただきたいと思います。

研修やサポート体制は以前と変わりましたか？

C 今は研修がすごく充実してきてるよね。

S そうやね。いろんなテーマの研修があり、子ども家庭センターでの業務が初めての人向けの研修も用意されている。

N 私も最初に基礎的な研修を受けて、記録の書き方や面接の進め方など、基本から丁寧に教えてもらえました。

C あと、ジョブトレーナー制度もあるよね。

N はい。わからないことがあればすぐに聞ける環境があるので、すごく安心でした。トレーナーだけでなく、周りの先輩方も自然に声をかけて教えてくださいます。

S マニュアルも整っているし、困った時に相談できる人も多いので、安心して仕事を覚えていける環境があると思う。

大変な仕事ですがどのように乗り越えていますか？

S 業務は虐待対応が中心で、シビアなケースが多いです。緊急の対応が必要な場合もあるので、緊張感はあります。

N 「こうしたい」と思っても状況的にできない時はほんまにしんどいです。

S 現場は理想通りにならないことも多いから、「自分の力不足」って抱え込みやすいと思う。

N あと、保護者との面接や電話が難しいと感じることはあります。

C みんながぶつかる課題やね。面接が夕方以降になることもあるし、緊急対応が入ることもあるし…。

S 体力的にも精神的にも負担は大きいよね。だから、予定が早く終わった日は有給休暇を取って帰るとか、計画的に連休を作って旅行するとか、休む時はしっかり休んでメリハリつけて頑張るというのも大事だね。

N 慣れてない分、判断や連絡の優先順位に戸惑うこともありました。

S この仕事は判断にスピードを求められるから、プレッシャーも大きいと思う。そういう時こそ、SVや上司に報告、相談をするという基本を忘れずに、落ち着いて対応できるように経験を積んでいってもらえれば大丈夫。

C あと、仕事がハードやからこそ、「大変やったな」って言い合える空気に救われることもあるね。

N 声をかけながら、みんなで支え合ってる感じです。

S 一人で抱え込むとしんどいけど、チームで動くし、結果として子どものためによりよい支援ができると、大変なことがあっても「頑張ってよかったな」と思えるよね。

どんな人がこの仕事に向いていると思いますか？

C 素直な人は向いていると思います。

S あとは、柔軟に考えられる人かな。思い通りにいかないことも多い仕事やから、「じゃあ次はどうしよう」って前向きに考えられることが大切やと思う。

N 私も最初は不安でしたが、先輩に相談しながら少しずつできることが増えてきました。

C 最初から全部できる人はいないからね。

S 完璧じゃなくていいし、経験を重ねながら成長していけばいいと思う。この仕事は、周りがしっかり支えてくれる環境があるから。

N 困った時に相談できる先輩がいるのは、本当に心強いです。